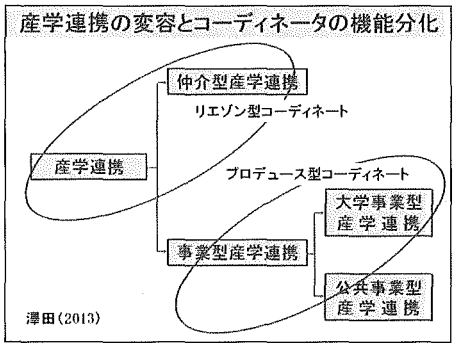
0625B1530-5

リエゾン、プロデュース、コーディネート
～語源調査から見えたもの～

澤田芳郎（小樽商科大学ビジネス創造センター）

1．はじめに

産学連携学会第 11 回大会において、澤田（2013）は産学連携の「仲介型産学連携」「事業型産学連携」への分化を背景にコーディネータも機能分化しつつあるとし、前者のそれを「リエゾンオフィサー型コーディネータ」、後者のそれを「プロデューサー型コーディネータ」と命名した（発表時に「リエゾンオフィサー型」を「リエゾン型」に変更）。



しかし外来語の使用にあたっては、一般に原語の意味に注意する必要がある。意味がずれていると、外国人とのコミュニケーションに支障をきたす。原語が本来持つ、あるいは新しく生まれる多義性による混乱に巻き込まれる恐れもある。外来語を組み合わせて新しい語を提案する場合はなおさらである。

2．語源調査とその結果

本調査で主として用いた辞書は、英語は寺澤芳雄（編）『英語語源辞典』（研究社、1997）および『The Oxford English Dictionary』（Oxford University Press、1989 年版）、仏語は『Dictionnaire Historique de la Langue Française』（Le Robert、2012 年版）、『Dictionnaire Culturel en Langue Française』（Le Robert、2005）、『Dictionnaire Étymologique de la Langue Française』（Presses Universitaires de France、1996 年版）および『小学館ロベール仏和大辞典』（小学館、1988）、ラテン語は『Oxford Latin Dictionary』（Oxford University Press、2012 年版）および水谷智洋（編）『羅和辞典＜改訂版＞』（研究社、2009）である。仏仏辞典の関連個所の一部は英訳を外注したほか、解読に小樽商科大学言語センター・江口修教授（フランス文学）のご教示を得た。

<u>リエゾン</u>

英語における「liaison」の初出は 1648 年で、料理用語の「つなぎ」としてであった。その後、イギリスの詩人バイロンが「密通」の意味で用い（1816 年）、ナポレオン戦争の直後だった同時期に「（部隊、同盟軍間の）連絡」という意味も成立した（1816 年）。

よく知られているように、「liaison」は仏語から英語に取り込まれた語である。仏語のそれは「つなぐ」「結ぶ」を主たる意味とする動詞「lier（リエ）」の派生語（名詞）で、まず「（建築における石やレンガの）接合面」を意味し（1206 年、古形「loison」として）、次いで料理用語としての「つなぎ」（1393 年）になった。16 世紀に「つなぐ行為」（1538 年）、「つながれた状態」（1588 年）として使われるようになり、並行して「（ある言説において諸要素を）結びつけるもの」（1538 年）、「（論理的、心理的）関係」（1656 年、パスカル）といった抽象的意味も出てくるが、1654 年には「liaison amoureuse（リエゾン・アムルーズ）」という語も「愛人関係」の意味で現われる。通信や交通の技術が発達する 20 世紀には、「（遠距離間の）連絡」（1938 年、サン＝テグジュペリ）という意味も加わった。そもそも「lier」は「結び付ける」「束ねる」などの意味のラテン語「ligare（リガーレ）」に由来する。日本語、特に産学連携分野で 1990 年代から用いられてきた「リエゾン」は、原語の古来の意味に沿った外来語と言える。

なお、日本語で「連絡将校」と訳される「liaison officer」「officier de liaison」は単なるメッセンジャーではない。彼らは司令部の決定を現場の戦況に即して解釈し、その場で具体的命令を発令する権限を与えられており、ゆえに参謀本部に属するエリートがこれを担う（日本大学・湯本長伯教授の指摘）。この意味性は産学連携、産学官連携においても発生する可能性があろう。

プロデュース

英語の「produce」は、まず解剖学の用語として「(骨が) 突起する、(体の器官・部分が) 伸びる」意で用いられた（1425 年）。その後、「提出する」（1499 年）、「(動物が) 子を産む、(植物が) 実を結ぶ」（1526 年）などを経て、1585 年に「演出する、上演する」、1587 年に「(状況を) 引き起こす」が現れる。淵源はやはりラテン語にあり、その「producere （プローデューケーレ)」は「前に (pro)」「導く (ducere)」を中心的意味とした。すなわち「リエゾン」と並んで「プロデュース」も原義を十分引き継いだ日本語である。

一方、「producer」が 1513 年に「生み出す者、作る者」、1784 年に「生産者」という意味で使われるようになったが、「演出家、製作者」という意味の出現は 1891 年である。現在の映画、テレビ業界ではディレクター（演出家、監督）が創作者として作品内容に責任を持つのに対し、プロデューサー（製作者）は作品をビジネスとして成立させる局面に関わり、出資者や経営者に対して責任を負う。この分担が確立したのは 1920 年代のことと思われるが、近年はプロデューサーにも関係者間の調整をもっぱらとする者がおり、職能の多様化を反映して「associate producer」「line producer」などのサブカテゴリーも生まれている。

コーディネート

ラテン語の「coordinatio（コルディナーティオー)」(「相互に (co)」「正しく配置する行為 (ordinatio)」) が、「論理的計画に基づく配置」を意味する名詞「coordination （コーディナスィオン)」として仏語に導入されたのは 1361 年である（司教で数学者だったニコル・オレスメが 1370 年に導入したとする辞書もある)。英語ではイギリスの哲学者フランシス・ベーコンが 1605 年、同じつづりの語を「調和のとれた組合せ」の意味で初めて用いた。それはベーコンの主著の一つである『学問の進歩 (Of the Advancement of Learning)』においてのことで、彼は学問の意義を述べる文脈で「the simple formes or differeces of things, which are few in number, and the degrees and coordinations whereof, make all this varietie:」と記し、単純な原理の組合せで多様な現象が記述できることを強調した。続いてこの語から「coordinate」が逆成し、まず「(身分・重要性・品格などが) 同格の」という形容詞（1641 年）に、次いで「対等にする」という動詞（1665 年）になる。後にはラテン語の原義に近い「適切に配置する」（1847 年）という使い方も現れた。以上から読み取れるのは「既存の事物を尊重しつつ相互の関係を整え、あるいは全体としていっそうの効果を発揮させる」という意味性である。

なお、英語で「coordinator」が「調整役」という意味で出現したのは 1864 年で、服飾用語として「coordinate」が用いられるようになるのが 1959 年である。「コーディネート」は 1960～70 年代に徐々に日本語化し、1980 年代以降、多くの分野で頻出するに至る。

3．結論

日本語の「リエゾン」「プロデュース」「コーディネート」は、それぞれ英語、仏語やラテン語の原義を色濃く引き継いでおり、「リエゾン」が「プロデュース」の、「プロデュース」が「コーディネート」の意味を一部含む傾向が見えるものの、中心的意味に重複や矛盾は認められない。したがって「リエゾン型コーディネート」「プロデュース型コーディネート」という語は、とりあえず使用して差し支えないと思われる。ただしこれらの語によって表象される概念については、今後もその妥当性が吟味されなければならない。